

2022. 10. 30 (日) 使徒5 : 17~26

5:17 そこで、大祭司とその仲間たち、すなわちサドカイ派の者たちはみな、ねたみに燃えて立ち上がり、

5:18 使徒たちに手をかけて捕らえ、彼らを公の留置場に入れた。

5:19 ところが、夜、主の使いが牢の戸を開け、彼らを連れ出し、

5:20 「行って宮の中に立ち、人々にこのいのちのことばをすべて語りなさい」と言った。

5:21 彼らはこれを聞くと、夜明けごろ宮に入って教え始めた。一方、大祭司とその仲間たちは集まって、最高法院、すなわちイスラエルの子らの全長老会を召集し、使徒たちを引き出して来させるために、人を牢獄に遣わした。

5:22 ところが、下役たちが行ってみると、牢の中に彼らはいなかった。それで引き返して、こう報告した。

5:23 「牢獄は完全に鍵がかかっている、番人たちが戸口に立っていました。しかし、開けてみると、中にはだれもいませんでした。」

5:24 宮の守衛長や祭司長たちは、このことばを聞くと、いったいどうなることかと、使徒たちのことで当惑した。

5:25 そこへ、ある人がやって来て、「ご覧ください。あなたがたが牢に入れた者たちが、宮の中に立って人々を教えています」と告げた。

5:26 そこで、宮の守衛長は下役たちと一緒に出て行き、使徒たちを連れて来たが、手荒なことはしなかった。人々に石で打たれるのを恐れたのである。

#### <説教>

ユダヤ人の宗教的・政治的権力である最高法院（サンヘドリン）による初代教会（直接には使徒たち）に対する迫害については4章にその最初のもので記されていました。本日の箇所からはその二回目が記されています。

〈そこで、大祭司とその仲間たち、すなわちサドカイ派の者たちはみな、ねたみに燃えて立ち上がり、使徒たちに手をかけて捕らえ、彼らを公の留置場に入れた。〉(5:17,18) 最初のときと同じように、まず使徒たちに手をかけて捕らえたのは〈大祭司とその仲間たち、すなわちサドカイ派の者たち〉でした。最初のときは彼らが、ペテロとヨハネが〈民を教え、イエスを例にあげて死者の中からの復活を宣べ伝えていることに苛立〉(4:2)ったことが動機でした。しかし今度は〈ねたみに燃えて立ち上が〉ったと書かれています。

サドカイ派の者たちはどうして〈ねたみに燃え〉たのでしょうか。それが先主日に見た12-16の中に記されていました。それは民衆が教会を尊敬していたことです(13)。「尊敬する」と訳された言葉は、「大きくする」という意味で、「たたえる」(ルカ 1:47)、「讚美する」(使徒 10:46)、「あがめる」(同 19:17、ピリピ 1:20)とも訳されています。つまり民衆は教会の人々を、そして殊に使徒たちを「偉大だ」と認めていました。それは既に見たように、神の大きな恵みですが、彼らの信仰による愛と義のわざの故でした。またナザレのイエスの名による癒やしとするしと不思議の故でした。そしてイエスを信じる者たちが男も女もますます増えていった故でした。それまでは神殿を中心とする世襲の祭司家系に連なる裕福な上流階級であるサドカイ派を民衆はある意味尊敬してはいたでしょう。正確に

は「すり寄っていた」「祭り上げていた」ということかもしれませんが。サドカイ派の人たちも自分たちは尊敬されるべき偉大な者たちだと思っていたのでしょ。そういう名誉や権威を自分たちサドカイ派で独占していたかったのでしょ。おそらくパリサイ派に対してもそんなライバル心を抱いていたことではしょ。それが、復活したナザレ人イエスの弟子などという者たちとその教えに聞く集団（初代教会）が民衆の尊敬を集めるなどとも我慢がならなかつたのでしょ。

更に言うなら、礼拝もそうでした。サドカイ派にとっては、民衆はこれまでどおり神殿に来て祭司たちが指導するやり方に従って捧げ物をし、昔ながらの礼拝だけしていればよかつたのです。しかし同じ神殿の中にあるソロモンの回廊にナザレのイエスの弟子なる者とその教えに聞く者らが集まるようになりました。そこでは自分たちがねたんで殺したナザレのイエスが復活したと教えられ、そのイエスが約束のメシヤ、キリストだと教えられ、そのイエスを信じて神に立ち返れなどと教えられ、そこに集まりそんな教えを聞く民衆がどんどん増えていったことにもサドカイ派はねたみを覚えたのでしょ。自分たちが仕切ってきたイスラエルの宗教が危険にさらされ、ついには自分たちの地位や権威が地に落ちると考えたのでしょ。

それで、もうこれ以上危険な教えがなされないように、自分たちの地位と権威を守るために、危険な教えをする〈使徒たち〉（今度はペテロやヨハネだけでなく、十二使徒全員ではなかつたかとの見方もある）〈に手をかけて捕らえ、彼らを公の留置場に入れた〉のです。そして翌日に〈最高法院、すなわちイスラエルの子らの全長老会を招集し、使徒たちを引き出し〉(21)て正式の裁判をして罪に定めよう、自分たちの言うことをきかせようと考えました。

〈ところが、夜、主の使いが牢の戸を開け、彼らを連れ出し、「行って宮の中に立ち、人々にこのいのちのことばをすべて語りなさい」と言った。〉(5:19,20)のです。書かれているように、このときは神が〈主の使い〉を遣わして特別に介入なさいました。後に12章ではペテロがヘロデによって捕らえられ牢獄に入れられ、殺される危機にあつたときに御使いによって助け出されたことが書かれています。また19章ではピリピでパウロとシラスが牢に入れられたとき、夜地震が起こって解放されたことが書かれています。それらは、そのときはそうすることが主のみこころだつたということです。だれの場合はそうなつて、だれの場合はそうならなかつた、その違いは何かなどと論じることは余り意味がないと思ひます。ただ、主の特別な働きがあつて助けられた場合、それはただ単に使徒たちが殺されないように、そのいのちを守ることだけでない、それ以上の目的、理由が主にはありました。それが、「行きなさい。神殿の中に立ちなさい。(神殿の中で)人々にこのいのちのことばをすべて語りなさい。」ということでした。先主日にも同じようなことを考えました。牢獄から神によって奇跡的に出され、危険を免れて「やれやれ助かつた。主よ感謝します。」となるのですが、その後、「もうこんな危ない目に、痛い目に、恥ずかしい目に会うのはこりごりだ。助かつた以上、もう神だ、イエスだなんて言うことは止めよう。」と言うのを主はお許しになりません。むしろ正反対でした。「この」いのち(単数)の「この」ことば(複数)を「すべて、漏れなく」語れ、とお命じになりました。言うまでもなく、ただ一人、私たちの救い主として神が備え与えてくださった主イエスご自身を、主イエスにある死んでも生きる復活のいのちを、この主イエスをキリストと信じ受

け入れる信仰を、この信仰に基づく悔い改めを、あらん限りのことばをもって人々に語り、証しし、宣べ伝えよということでしょう。それはまた既に2～4章に書かれているようにペテロとヨハネが語って来たことでした。このように、主がわざわざ使いを遣わして使徒たちを牢から引き出されたのは、いいわば「寸暇を惜しんで」人々に教え、みことばを宣べ伝えさせるためでした。そして、みことばの宣べ伝えがなされることもただ神の恵みによること、神のみこころによることだということを使徒たちに教えるためでした。そしてみことばを宣べ伝える使徒たちに、「あなたがたは『このいのちのことばをすべて語る』ことを主から委託された者なのだ。あなたがたもまたわたしがこの世に遣わして、主のみこころを、主のわざを行う『主の使い』なのだ。」ということ教えるためでした。また更には『行きなさい』と言うわたしが先に行くのだ。あなたがたはそのわたしについて行くのだ。『立ちなさい』と言うわたしがあなたがと共に立つ。『語りなさい』と言うわたしが聖霊によって語るのだ、聖霊が語らせてくださるのだ。」と保証し、励ましてくださったのです。

それで、〈彼らはこれを聞くと、夜明けごろ宮に入って教え始めた。〉(21a)のです。〈夜明けごろ〉、朝も早くからということですから、牢から連れ出されて後、ほとんどすぐだったでしょう。その後のことは21~26節に書かれています。このとき使徒たちには「手荒なこと」はされませんでした。ここにも主のお恵みと助けがありました。そうやって主は使徒たちを更に続く戦いに備えさせなさいました。私たちにも同じように主のみこころによって「人々にこのいのちのことばをすべて語る」務めが委託されているのです。